

「敗戦から立ち上がるには英語を学ばなくてはならない」。戦後復興を目指す国家のかたちを思い描き、

中学生が英語で自分の考えを述べる大会を作った人物がいた。故鈴木啓正氏である。英語の弁論大会を作ったのは著名な学者でも、政治家でもなく、特攻隊として戦後を迎えた大学生だった。

週刊

コラム

昭和21年に高松宮杯全日本中学校英語弁論大会の礎を築いてから60年間、病を押して最期まで先頭に立ち指揮を執っていた鈴木氏の胸には、「世界の情勢をしっかりと理解し国を動かすことができる国際人を育てる」という戦死した戦友との約束がいつも刻まれている。

た。鈴木氏の生き方から日本の教育の針路に悩む私たちが学ぶことは多い。

英語の弁論大会を始めるにあたり、高松宮殿下のご指導を賜るため御殿に通うこと半年。お目通りがかなうまで通い続ける鈴木氏の心には熱い信念があったのだろう。「国家が荒廃している今、一番大切なことは日本の若人が希望を失わないことです」と訴え、高松宮から杯を賜ったのである。この時殿下は「継続は力なり」と言うが、教育は国の力だ。この大会は半世紀、50年続けたい。続けなければ意味がない。日本は戦いに敗れ、今後は国際国家として生きていかねばならない。その時一番必要なのは、国際語である英語だ」とお答えになっている。

一つの教育事業は国家事業の役割を担う。国力に

熱い志で教育を



牧島可憐

東京純心女子大講師
早大大学院研究員

は、政治力や外交力や経済力、軍事力も含まれるが、やはり「人の力」ほど国家の根幹となるものはない。そして教育ほど結果が出るまでに時間を必要とするものもない。だからこそ50年間継続することに意味があり、51年目を迎えて高円宮杯となり今年で58回目となるまで一度も休むことなく常に「ティーンエージャーズ・ドリーム」を表現する場を提供し続けてきた。

「50歳、60歳になっても希望をもち、目的を持って生き、ロマンのある人は青年です。20歳の若者でも夢がなく、目的もなく、人生に挑戦しない人は老人です」。鈴木氏の言葉は生き方そのものであり、熱い志で教育を見つめる大人の模範だった。

神奈川県の予選大会に出場する中学生は年々増加し、県大会を突破するのも難しくなっていると聞くと、私が神奈川県代表としてこの大会に出場したのは15年前のことだ。予選を突破し全国から集まった中学生と昼夜を共にし夢を語った経験は生涯忘れることはない。

県内でも教育現場における悲しいニュースが報道されている。子供たちが明るくのびのびと夢を語れる環境をつくるのは容易なことではないが、行政、学校、教育関係者だけに任せていればよい問題ではない。国家の宝である子供たちに必要なのは見本となる大人の姿である。

日本の未来を担う子供たちを育成する責任は私たち一人一人にある。